【第三種郵便物認可】 日経 2019.4.23 日

技あり企業

会川鉄工（福島県いわき市）

風力発電タワーで急成長

震災後、原発関連から転換

再生可能エネルギーのひとつとして注目を集める風力発電。全国で風車の設置が広がる中、回転翼を支えるタワーの製造で急成長しているのが会川鉄工（福島県いわき市）だ。

いわき市四倉町の高台にある真新しい工場には、長さ数十㍍の製造中のタワーが並ぶ。2年前に国内初の風力発電用タワーの専用工場として稼働したばかりだが、隣接地では同規模の工場を建設する計画が進む。

会川文雄社長（71）は「風車の大型化に対応できるより大きなタワーの製造拠点にしたい」と意気込む。

会川鉄工はもともと原子力発電所の廃材を収容する鉄製容器などを手掛けていた。それが東日本大震災後の原子力発電所の事故で一気に失われた。

会川社長は震災復興のため県などがつくった再生可能エネルギーの研究会に参加。海外視察を重ねるなかで「自社の技術を生かせる」と直感したのが風力発電タワーの生産だ。

タワーは鉄製の円筒を継ぎ合わせてつくる。先端部にいくほど細くなるうえ、発電機の重量や回転する翼の力がタワー先端部に集中する特殊な構造だ。数十㍍のタワーでミリ単位の正確性が求められる。

精度と耐久性のカギになる技術が溶接。幸い社内に溶接の熟練工が多くいた。

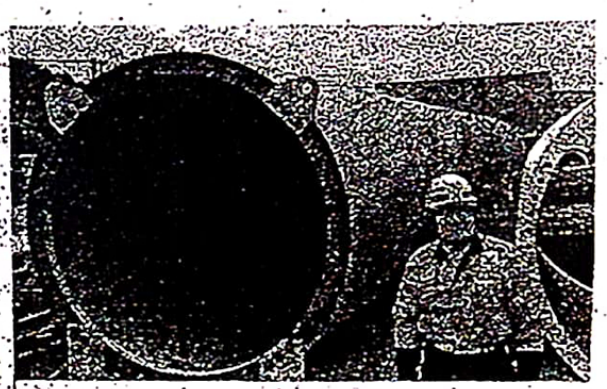
風力発電装置の市場は長い歴史を持つ欧米の企業が先行し、国内市場は輸入品に席巻されていた。国内にお手本となる製品がないなかで試行錯誤を続け、現在は年間200本以上を生産する国内最大手になった。

欧米勢や低価格で売り込みを狙うアジア勢と戦える力がついてきたが、対応できないサイズもあり、品ぞろえの拡大を急ぐ。

プラントなど国内の大手企業の新規参入について会川社長は「人手がかかる割に単価が安いため様子をみているのでは」と語る。タワーの納入価格は1本数千万円。大企業が参入するのには微妙な水準とみるが市場の拡大が続けばライバルが登場する可能性がある。

国内外メーカーの乱売合戦になった太陽光パネルの二の舞いを避けるためにも、技術力を一段と高め納入実績を積み重ねることが必要となる。

（郡山支局長　村田和彦）



会川社長は、風力発電タワーで自社の技術を生かせると直感した

東北